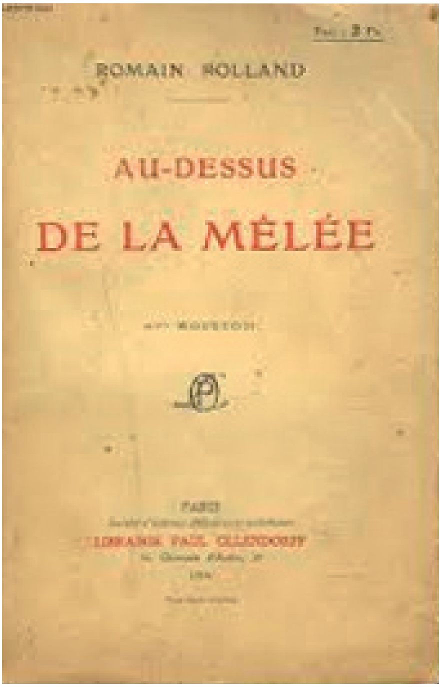
ユニテ

2015. 4

42



一般財団法人
ロマン・ロラン研究所

表紙　アラン『マルスあるいは裁かれた戦争』（1921）（左）
ロマン・ロラン『戦いを超えて』（1915）（右）

目次

第一次世界大戦下の知識人――アランとロマン・ロラン …… 久保昭博 …… 1
村上光彦氏を偲んで …… 永田和子 …… 22
ロマン・ロランと自筆蒐集 …… 植松晃一 …… 25
「第一次世界大戦下の知識人――アランとロマン・ロラン」の講演を聴いて …… 井土真杉 …… 28
『ピエールとリュース』を観劇して――アトリエ劇研三〇周年記念公演―― …… 中田裕子 …… 30
パリ便り …… シッシュ・由紀子 …… 32
山口俊章先生の訃報を聞いて …… 上西妙子 …… 35

ロマン・ロラン研究所便り

短信……36
訃報……37
研究所設立趣意書……38
研究所の活動……39
読書会報告……45
二〇一四年度　賛助会員、寄付者名簿、寄贈図書……46
編集後記……47

第一次世界大戦下の知識人
――アランとロマン・ロラン

久保昭博

アランとロラン――平行する生の軌跡

アランとロマン・ロラン。わずかに二歳違いの同時代人であり、[1] ともに二〇世紀前半を代表する知識人であるにもかかわらず、奇妙なことにこのふたりの生の軌跡が交わることはほとんどない。たとえば近年邦訳が刊行されたベルナール・デュシャトレの『ロマン・ロラン伝』は四〇〇頁を越える浩瀚な著作であるが、そのなかでアランの名が言及されるのは、わずかに二度だけである。アランとロランは出会うことが少なかったというだけではない。彼らはむしろ、多くの点において対照的な存在であったという印象すら与えるのである。両者の特徴を思いつくままに挙げてみよう。ノルマンディー生まれの大男と[2] ブルゴーニュ生まれの病弱で繊細な男、ジョルジュ・カンギレムやシモーヌ・ヴェイユを育てたリセの良き教師と、生活のために仕方なく芸術史を講じた大学教師、そしてフランス的なモラリストの系譜につらなる哲学者と、音楽、とりわけドイツ音楽に情熱を注ぎ、その後は文学に身を捧げたノーベル賞作家……。

だがこのように対照的な彼らの思想と行動は、それぞれの生涯においても、また世界史においてもきわめて重要な一時期に一致する。言うまでもなく、一九一四年夏に第一次世界大戦が勃発したとき、両者がともにとった反戦と平

和の立場がそれだ。後述するように、開戦当時には多くの知識人が戦争の熱狂にとらわれたことを鑑みれば、彼らが示した態度の一致は特筆すべきものである。とはいえ反戦平和をいかに実践するか、そのために二人が採った方法を比べてみると、両者の対照性はふたたび際立ってくる。ロランは開戦まもない時期から仏独間の和解の思想を新聞などで訴え続け、それらの記事をまとめた『戦いを超えて』（一九一五年）によって、いちやく戦時における平和運動の象徴となった。他方のアランは、反戦の意志をもちながらもあえて志願して戦場に赴き、戦時中には戦争について発言することをほとんどしなかった。彼が戦争についてのまとまった著作である『マルスあるいは裁かれた戦争』――彼自身が戦争についての「攻撃文書（パンフレ）」と位置づけるもの――を公にするのは、一九二一年のことである。

アランとロマン・ロラン。この二人の知識人が戦争に対して投げかけていた眼差しはどのようなものであったのだろうか。以下ではまず開戦当時の知識人の反応を素描し、そのうえで、同じく反戦平和という立場をとりながら異なる仕方で戦争に向き合った二人の歩みと思想を比較してみたい。

精神の動員――知識人たちの熱狂

思想の問題として、あるいはよりひろく、文学や芸術もふくむ文化の問題として第一次世界大戦を考える際に、もっとも重要となるのが「総力戦」という側面である。数多くの犠牲者を生み出した巨大な規模の戦争が、四年間という長期間にわたって継続した背景には、人的動員、そして産業や経済など物質面における動員は言うまでもなく、戦闘行為には直接従事しない人々も含め、国民全体の「精神」までもが動員されたという事情がある。この精神的動員に深く関与したのが作家や芸術家たちである。事実、開戦当初には、戦争の熱狂をあおる知識人の姿が数多く見られた。たとえばモーリス・バレス。当時、愛国主義を代表する作家となっていた彼は、自らの筆によって国民の士気を鼓舞することを決意して大量の時評を発表した。その中に次のようなものがある。

フランスの精髄は、蝮の枕を下にして眠っており、内戦という忌むべき絡み合いのうちに窒息するかに思われた。だが警鐘が鳴り、眠れる人は愛の飛躍の中に目覚めたのだ。カトリック、プロテスタント、ユダヤ教徒、社会主義者、伝統主義者は直ちに自分らの不満を打ち捨てた。憎しみの刃は魔法のごとく消え去った。蒼白の空の下、無数の論争は沈黙する。各人は言う。「祖国の安泰のために働く人々の邪魔は、たとえうちに秘めた考えであっても、何一つすまい」と。[3]

ここで言われているように、戦前のフランスは、ドレフュス事件の後遺症などにより、政治的闘争が絶えない不安定な状態にあった（七月三一日には社会主義のリーダーとして反戦運動を率いていたジャン・ジョレスが、右翼活動家によって暗殺されたことを想起しよう）。しかしながらバレスは、「敵」が国の外部に現れた瞬間に、こうした「内戦」状態が消滅したと言う。対外戦争のために挙国一致体制をつくりだすことの必要性を、愛国主義的な感情に訴えることによって語ったこの作家の言葉は、ドイツがフランスに宣戦布告を行った翌日の八月四日に、大統領レーモン・ポワンカレのメッセージとして議会で読み上げられた演説に含まれていた「神聖同盟（ユニオン・サクレ）」の精神と完全に合致するものである。

バレスの言葉は単なるプロパガンダではなく、当時のフランスの実情をかなりの程度正確に言い表すものであったといえるだろう。実際に、彼のように自他共に認める愛国主義者でなくとも、知識人や芸術家の多くは、それぞれが携わる活動をすすんで戦争と結びつけることで、戦争に協力しようとしたのである。たとえばレミー・ド・グールモンは、自らが中心人物のひとりとなって率いていた『メルキュール・ド・フランス』誌が戦争勃発から数ヶ月ぶりに復刊した際に、次のように書くことになる。

『メルキュール』は、戦争を準備するというよりは、精神の無私無欲な作品により注意を払っていた雑誌であっ

た。この雑誌は戦闘的になって目覚めた。だがそこに意図的な選択はほとんどない。それが戦闘的なのはフランス全体が戦闘的であり雑誌もフランスの一部であるからだ。今日、その他の感情が存在する余地ははっきり言ってない〔……〕[4]。

グールモンといえば、かつては他でもないこの『メルキュール・ド・フランス』誌に愛国主義を揶揄する記事を発表し、物議を醸したこともある作家だ。そのような人物に、フランスには戦闘的な感情しか存在しないと書かせるほど、大戦が銃後の人々の精神に及ぼした影響は大きかった。

文学や芸術のみならず、学知もまた「動員」されたことも忘れてはならない。歴史教科書の作成者として国民的に名を知られていた歴史家のエルネスト・ラヴィスをはじめとして、開戦当時に愛国主義的な情熱に駆られた大学人は少なくなかった。彼らもまた、しばしば自らの専門性を戦争の大義に結びつけた。ここでは哲学者アンリ・ベルクソンの演説を引こう。

ドイツに対して開始された戦いは、野蛮に対する文明の戦いである。皆がこれを感じ取っているが、我々の〔人文・社会科学〕アカデミーは、おそらくこのことを述べるのに特別な権威を持っているだろう。大部分を心理学、道徳そして社会の問題の研究に定められたアカデミーは、ドイツの粗暴とシニシズムのなかに、またあらゆる正義と真実に対するドイツ人の軽蔑のなかに見られる野蛮状態への退行に注意を促しつつ、純粋に科学的な義務を果たすのだ[5]。

野蛮国ドイツに対する文明国フランスの戦いと位置づけることで戦争の大義を自らのものとしようとするレトリッ

クは、戦時中のフランスにあっては大衆的な新聞などによってもしばしば語られたものである。ベルクソンは、学問的な権威によって裏付けを与えることで、一般的な気分に訴えかけるこうしたイメージを紋切り型として流布させるのに一役買ったのであった。なお彼はまた、一九一七年に講演旅行のために渡米した際、合衆国の参戦を促すべくウィルソン大統領と面会するというフランス政府に与えられた任務を果たしたことを付言しておこう。[6] 哲学者は、自らの名声を外交の役にも立てたのである。

ベルクソンの発言に典型的にあらわれていたように、大戦は文化を争点とする戦争を生み出した。人々は自国ないしは自民族の文化――フランスの場合は「文明（civilisation）」――を守ることを戦争の大義とし、戦いは文化の価値や優劣を賭すものとなったのである。その意味で大戦は「文化戦争」であったといえよう。ところでこの「文化戦争」であった大戦はまた、「戦争文化」を生み出しもした。この「戦争文化」という概念は、一九九〇年代以降、従来の軍事史や外交史を中心とした研究を相対化し、大戦を文化史的なアプローチから再考しようとした歴史家たちによって提案されたものだ。文学史や芸術史における大戦の位置づけの再検討にも影響を与えたこれらの歴史家たちが前提としていたのは、戦争が戦場だけではなく銃後の生活の隅々にまで浸透し、女性や子供までもがそれぞれの仕方で「戦争を生きる」ことを余儀なくされた状況によって、固有の文化の形態が現れたという認識である。[7] 戦時における知識人の思想や行動も、こうした「戦争文化」との関連で考えられなければならない。

ロマン・ロランの政治参加（アンガージュマン）

開戦当初に知識人たちが示した熱狂とそれによって彩られた「戦争文化」のなかに置き直すと、ロマン・ロランのとった行動は際立って見える。一九一四年の夏、ロランはスイスに滞在していた。彼もまた、多くの人々と同じく戦争が不可避であると考えてヨーロッパの行く末を心配して、そして驚きとともに開戦をむかえた。[8] しかし彼が多くの

知識人たちと異なっていたのは、そこから戦争の正当化に向かおうとはしなかった点である。ジャン＝リシャール・ブロックら自分の親しい友人たちまでもが「祖国防衛」の大義を掲げて戦場に赴くなか、彼は自らの身の振り方について、ふたつの選択を行った。ひとつは、スイスにそのまま残り（年齢と交通事故の後遺症のため、彼自身が召集されることはありえなかった）、ジュネーヴに開設された国際赤十字の戦争捕虜事務局の業務に携わることである。そしてもうひとつの、より重要な選択は、筆を執って戦争に対する自らの意見を公にすることであった。こうして彼は、九月二日付の『ジュルナル・ド・ジュネーヴ』紙に「ゲルハルト・ハウプトマンへの公開状」を発表したのを皮切りに、この新聞を中心に次々と論説を掲載しはじめた。彼の主張の基調をなすのは、暴力と破壊に対する糾弾と、ヨーロッパという理想の下でフランスとドイツ両国民が和解することの訴えである。そして戦争勃発からほぼ一年後の一九一五年秋、これらの論説を集め、そのひとつから題をとった評論集が刊行された。それが『戦いを超えて』である。

ロランの評論はフランス国内で物議を醸した。賛同の声がなかったわけではない。たとえばマルタン＝デュ＝ガールは、ロランに手紙を送って『戦いを超えて』に対する共感と感動を伝えた。マルタン＝デュ＝ガールの賛同は公のものにはならなかったが、一方でガストン・ティエソンら幾人かの友人たちは、ロランを擁護する論説を新聞などで発表し、さらにアンリ・ギルボーは『ロマン・ロランに味方して』という小冊子を一九一五年に刊行した。またロランの周囲には、ピエール・ジャン・ジューヴら平和主義に共鳴する友人のサークルが次第にできあがっていった。[9] とはいえ、より大きく響いたのは、愛国主義者たちから発せられたロランに敵対し彼を糾弾する声である。『フランスに敵対するロマン・ロラン』（一九一五年）を発表したアンリ・マシスや、極右団体アクション・フランセーズを率いるシャルル・モーラスらは、彼のことをジュネーヴという安全な場所から高みの見物を決め込みつつ、祖国に危害を加える裏切り者、さらには「親ドイツ」主義者であるとして非難したのである。

実際のところ、ロランのテクストを読めば、彼の戦争に対する態度も、またドイツに対する態度も両義的であるこ

とが分かるだろう。たとえば彼は、「二つの悪の中で、軽いもの――汎ドイツ主義か、汎スラブ主義か？」（一九一四年一〇月一〇日付『ジュルナル・ド・ジュネーヴ』）と題された論考の中で、次のようにのべている。

ドイツの私の友人たち〔……〕、あなたたちの旧いドイツを、そして私がドイツに負うている一切のものを、いかばかり私が愛しているかを、あなたたちは知っている。私はベートーヴェン、ライプニッツ、ゲーテの子である、少なくともあなたたちと同じ程度に。しかしあなたたちの今日のドイツに、私は何を負うているのか。[10]

ここでロランは、ドイツを二つに分けている。ひとつは「旧いドイツ」、すなわち優れた芸術家や文学者が輩出した国であるドイツであり、もうひとつは「今日のドイツ」、すなわち軍国主義的なプロシアのドイツである。『ジャン・クリストフ』の作者は、前者のドイツに対しては敬愛の念を惜しみなく捧げる。このドイツは、自らの「父」であり、それゆえヨーロッパの名の下にフランスと理解し合うことのできる国だ。だがそのようなドイツは、現在、もうひとつの軍国主義的ドイツの下に隠れてしまっている。このドイツは、ベルギーを蹂躙し、ランスの大聖堂を破壊するドイツである。このようなドイツに対するロランの非難は容赦ない。その言葉はしばしば、当時フランスで流通していた「野蛮なドイツ」の紋切り型をそのままなぞってすらいる。たとえば「ゲルハルト・ハウプトマンへの公開状」では、ドイツが中立国ベルギーに攻め入ったことについて、ハウプトマンを名指しつつこう非難している。

ルーヴァンは今や一塊の灰にすぎない――芸術、科学の宝をもったルーヴァン、聖都ルーヴァンが！　だがいったいあなたたちは誰なのか？　今やあなたたちは何という名で呼ばれたいのか、ハウプトマン、野蛮人という名称を拒否するあなたたちは？　あなたたちはゲーテの孫なのか、それともアッティラの孫なのか？[11]

このように必ずしも「親ドイツ」ではなく、さらには別のところではラテン的文明を賛美するなど、当時フランスに支配的だった言論の風潮に多少なりとも同調していたロランが攻撃の的となったのはなぜだろうか。その理由のひとつは、もちろんロランの言説自体に由来する。敵を絶対的な悪に仕立て上げるべく精神的動員が行われ、「文化戦争」が遂行されている状況において、平和と和解を訴えるのみならず、ドイツ文化への恩義を公にすることは、それだけで裏切り行為と受け取られかねなかった。だが、彼が愛国主義者たちの憎しみを一身に集めた背景には、ロマン・ロランという名前が帯びていた知識人としての象徴的価値があったこともまた疑い得ない。事実『ジャン・クリストフ』を一九一二年に完成させて以降、ロランの作家としての名声は高まり、翌年にはアカデミー・フランセーズ大賞が彼に授与されていた。『戦いを超えて』をめぐる騒動が一段落した一九一六年、「すぐれた理想主義」を理由として、前年度のノーベル文学賞がロランに与えられたことも、彼の知識人としての重要性を証することになった。いずれにせよロランと彼の『戦いを超えて』が、強力な同調圧力を発する愛国主義的な「戦争文化」を生きる人々の目に格好の異分子として映ったことは間違いない。その熱狂にとらわれた人々は、ロランのテクストに書き込まれていたニュアンスを読み取ることなく、憎しみを表明したのである。

戦争に相対した知識人たちのふるまいを、ロラン自身はどのようにとらえていただろうか。一九一五年四月の『ジュルナル・ド・ジュネーヴ』紙に掲載された論考で、彼は知識人（文学者）と戦争の関わりについて言及している。

戦争の開始このかた、知識人たちは、いずれの陣営においても、大いに活躍した。この戦争はさながら彼らの戦争だといってもよいほど、彼らは激しい熱情をそれに注いだ。[12]

目下進行中の戦争を戦っているのは、兵士たちではなくむしろ知識人たちである――そう述べるロランの言葉は、

「戦争文化」の本質を突いている。彼は大戦が実際に砲弾の飛び交う戦争だけでなく、もうひとつの戦争、つまりは言葉の飛び交う戦争を生み出したという事態を捉えていた。そしてこの後者の戦争において戦場となるのが「世論」である。『戦いを超えて』に収められた複数の論考において、彼が世論に焦点を合わせた批判を行っているのはそのためだ。彼の目には、前線と銃後というふたつの戦場を有する大戦の構造が次のように見えていた。

世論の力は今日では巨大である。いかに専制的であり、また勝利の方向に進んでいる政府といえども、世論の前に戦々恐々としてそれにこびへつらわないものはない。[13]

戦争は政府がイニシアティブをとってではなく、世論の意向に従って行われる。あるいはより極端な言い方をすれば、前線の戦争は銃後の戦争の結果として行われる。このような観点からすれば、言語の戦争あるいは「文化戦争」は、もはや比喩ではなく本来の意味での戦争であると言わざるをえない。とはいえ前線と銃後というふたつの戦場で行われている戦争は、密接に連動しつつも決定的に別の次元で行われている戦争である。ロランはまた、ふたつの戦争の間に連続性と同時に断絶を見ることの必要性も指摘していた。

ところが戦闘とは無関係で、少しも行動に与らずに、語ったり書いたりして、人工的でしかも激烈な興奮の中にとどまり、そのはけ口をもたない民間人たち、そういう人々は熱狂的な暴力の風にさらされている。そしてそこに危険があるのである。なんとなれば彼らは世論そのものであり、それが意見を表明できる唯一のものであるからである（その他はすべて禁じられている）。私が書くのは彼らのためであって、戦っている人のためではない（彼らは私たちを必要としない！）。[14]

「行動」が支配する前線と「言葉」が支配する銃後の間にみられる断絶というテーマは、たとえばアンリ・バルビュスの『砲火』（一九一六年）などの戦争文学や、あるいはジャーナリズムなどによって次第に強調され、大戦を語る際の重要なイメージとして定着することになるものだが、ロランはこれをはやい段階で提示していた。このようにふたつの戦場を見きわめたロランは、世論という戦場に介入してその野蛮化をおさえることが、反戦平和主義の知識人として自らが行うべき務めであるという自覚を持つにいたったのである。

『戦いを超えて』を出版した後、戦時中は一時期沈黙したロランであったが、戦後は世論への介入とその批判をより大規模に展開しながら続けた。パリ講和会議が終結に向かい、ヴェルサイユ条約が締結されようとしていた一九一九年六月、彼は『ユマニテ』紙に「精神の独立宣言」を発表する。バルビュスをはじめとするフランスの平和主義者のみならず、敗戦国ドイツを含んだヨーロッパ各国、さらにはアメリカやアルゼンチン、そしてインドからはタゴールなど、ヨーロッパにとどまらない世界中の知識人――戦争を機にロランがヨーロッパを超えて「世界」という次元の文化を発見したことは重要だ――からの署名を得たこのアピールは、大戦中にロランが反戦平和主義を代表する知識人となったことを証すものである（ちなみにここにはアランも署名を寄せている）。このなかでロランは、知識人たちの戦争協力について次のように振り返っている。

> 戦争がわれわれ（＝「精神」の労働者たち）の隊列に、混乱を投げ入れたのだった。知識人の大部分は、かれらの科学や芸術や理性を、それぞれの政府に奉仕するために使った。われわれは、だれを責めようとも思わない。個人の魂の弱さと、集団的な大きな流れの要素となっている力とを、われわれは知っている。この流れが、一瞬にして、魂たちを流し去った。なぜなら、それに抵抗するための予見は、何もなかったからである。少なくともこの体験が、未来のためにわれわれに役立つように！[15]

「集団的な大きな流れ」すなわち世論が強大な力とともに突如として姿をあらわしたこと、それがロランの診断した大戦の新しさである。この暴力的な集団の力に対して知識人の隊列を組み直すこと、そしてそのためにまず精神の「動員解除」を行うこと、それがロランにとっての戦後のはじまりであった。

戦後に発表された世論と知識人の批判という点でもうひとつ興味深いテクストが、ロランが一九二〇年に発表した小説『クレランボー』である。[16]「戦時の一人の自由な良心の物語」という副題が示すとおり、この中編小説はアジェノール・クレランボーという一人の作家の良心の軌跡を描いた物語であるが、その隠れた主人公は世論を作り出す顔の見えない群衆だ。「はしがき」には次のように書かれている。

この作は、戦争の影に覆われてはいるが、戦争を主題とするものではない。この作の主題は、群衆の魂の淵に個人の魂が呑み込まれるということである。それは、私の考えでは、人類の将来にとっては、一国の一時的な主権よりもはるかに重大な出来事である。[17]

この虚構作品でもまた、同時期に書かれた「精神の独立宣言」と同様に、集団に対立する個、あるいは世論の巨大な力が主題となっていることが容易に見て取れる。クレランボーは戦争勃発に際して、他の多くの人々と同様に熱狂の渦に捉えられ、戦争を賛美する言辞を声高に叫ぶが、息子の戦死を機に「祖国」という理念の欺瞞に気づき、それからは絶えざる迫害を受けつつも、個人として精神の独立にこだわって戦争反対を訴え続け、最後には狂信的愛国主義者の手にかかって命を落とす——このようなあらすじの物語からは、「集団的な大きな流れ」に呑み込まれた戦時中の典型的な知識人とロランが体現した反戦平和主義者のアマルガムである主人公クレランボーの姿が浮かび上がってくる。作者自身は「そこに自叙伝的なものをいっさい求めてはならない！〔……〕私は私の主人物に私の思想の若

干を移し入れたけれども、彼の人物、性格、彼の生活の事情などは彼自身のものである」[18]と予防線を張っているとはいえ、クレランボーにロラン自身の姿を投影する解釈は自ずと導かれよう。仮に自伝的小説ではないとしても、『クレランボー』がロランの思想を表明した「問題小説」であることに変わりはない。その物語の大きな部分を占める主人公の独白や思想の表明は、作者ロラン自身の言葉と分かちがたいものとなって紙の上にあらわれ、読者はいつしか、虚構作品というよりは、ロラン自身の独白を読んでいるような気にさせられるからだ（この作品の「つまらなさ」もそこに由来するだろう）。この内面のドラマは、ロランが生きた銃後の戦争、そして世論という「戦場」の暴力を明るみに出すものである。その意味で『クレランボー』は、バルビュスの『砲火』やジョルジュ・デュアメルの『文明』など、復員作家が自らの戦闘経験を描いた戦争文学と同様の資格で、ロラン自身の戦争経験から発した戦争文学たりえている。

「精神の奴隷より肉体の奴隷に」——政治参加（アンガージュマン）を拒否するアラン

アラン、本名エミール＝オーギュスト・シャルティエは、大戦が勃発した当時、リセ・アンリ四世校の教師を務めていた。教師として以外にも、『デペッシュ・ド・ルーアン』紙に定期的に発表される「プロポ」の作者として、さらには兵役を一年延長することで戦争の準備を整える意味があった「三年法」（一九一三年制定）に強く反対した活動的知識人としてすでにひろく知られていた彼は、開戦前後の状況にどのように反応しただろうか。

一九一四年七月末から八月にかけて、ヨーロッパ全体の情勢が一気に戦争へと傾くなか、アランは、自分の国がこの国際的紛争に否応なく巻き込まれたことを感じながらも、「プロポ」を通じて、フランスの介入によって、ロシアがバルカンの紛争に加わることを断念させられるのではないかと問いかけ（七月二八日）[19]、またその直後には、平時であれば抑圧されている獣性の発露によって「内面の動員」が行われることに警鐘を鳴らしつつ、平和は恐怖ではなく

「理性」の産物であることを説いた（七月三〇日）[20]。そして宣戦布告がなされた八月三日には、戦争は「最良の者たちの虐殺」をもたらすのであり、残された者によって平和が築かれたとしても、そのときには「本当に高貴な血」はもはや残っていないであろうという不吉な予告を行った[21]。これらのテクストが証しているのは、アランが刻々と移り変わる情勢の下、最後の瞬間まで戦争回避のために筆を執っていたということである。それから約一ヶ月後、すでに戦争が始まっていた八月二七日に発表された「プロポ」では、あたかもロランと同調するかのように、「わたしは一民族全体を憎むことを拒む」と書いて、ドイツの国家としての横暴を憎みつつもその人民に対する憎しみを抱く必要はないことを強調した[22]。ただしアランがロランと異なるのは、このテクストが発表されたとき、ちょうど兵士として重砲兵隊に合流しようとするところであったということ（彼ははやくも八月四日に兵役志願の届出を行った）、そしてこれ以降、戦争終結まで、戦争に直接関わる発言を公にすることをほとんど止めたということである。戦時中に彼が発表した著作は、自身が哲学の入門書と位置づける『精神と情念に関する八一章』（一九一七年）のみであり、またそれにつづいて終戦後に公刊したのも、独自の芸術哲学を展開した『芸術の体系』（一九二〇年）であった。

なぜ彼は反戦主義者でありながら戦争に行き、そして知識人でありながら戦争について語ることを（一時的に）止め、芸術や哲学に関する著作の構想を戦場で練ったのだろうか。私見によれば、この二つの問いの間には深い関係がある。

反戦主義者でありながら、さらには四六歳という年齢にもかかわらずアランが志願した理由については、当時の少なからぬ人々と同様に彼もプロシア軍国主義を悪と捉えており、そのためにこの戦争を「戦争を終わらせるための戦争」と見なしていたであろうことが推測される。だがアランを戦場へと赴かせたもうひとつの、そしておそらくより重要な動機は、彼が戦争を思想の問題として捉えようとしていたことにある。そのために彼はまず、戦争を自らの目で見ようとした。さらにその目は士官の目ではなく、戦場を間近に見る一兵卒の目でなければならなかった。『戦争

の思い出』（一九三七年）には、あるとき昇級を提案された彼が、「あちら側に引きつけられたくなかった」ために「本能的反応」を示してそれを断ったことが記されている。[23] 戦場を「見る」だけでなく、肉体的な経験を通して戦争を「生きる」こと、それが戦争を認識するためにアランが自らに課したことであった。

さらにもうひとつ、アランは、戦争の真の姿を認識するためには、それを取り巻いている「言葉」から離れなければならないと考えていた。戦争をめぐる言葉とは、銃後の社会で知識人たちによって発せられている言葉や、それらによって形成されている世論にほかならない。一九二一年の「プロポ」のなかで、アランは戦争が始まったときから「馬鹿者ども」がのさばることを理解したために、「民間人の隷属」よりも「軍人の隷属」を好んだと述べている。彼が銃後の社会に見たのは、監視されて「平凡な警察官」の次元にまで墜ちた思考であり、そのために礼節をも失った世論であり、さらには政治家や知識人の言葉から傾聴に値するものがすべて失われた状況であった。アランは当時を振り返ってこう述べている。

戦争状態が形成されることによって、他にもたくさんあるもののなかからこうした非人間的結末がもたらされることはまったく驚くに値しない。精神の奴隷になるよりは肉体の奴隷となることを好んで、私は軍隊のなかに逃げ込んだのだ。[24]

ロランと同様、アランも次第に過熱し、暴力的になってゆく世論と、それにともなって困難の度合いを増してゆく精神の独立を銃後の社会に見出していた。だが彼は、『戦いを超えて』の作者のように、こうして形成されつつあった愛国主義的な「戦争文化」に介入し、世論という戦場で繰り広げられる「言葉の戦争」に加わろうとはしなかった。「精神の奴隷」が「肉体の奴隷」よりも耐えがたいものであったと述べる彼は、むしろ「戦争文化」に背を向け、実

際に砲弾が飛び交う戦場に身を置くことを選んだのである。

その戦場で構想されたアランの著作に目を転じてみよう。すでに述べたように、『精神と情念に関する八一章』や『芸術の体系』は、戦争を正面から扱うものではない。だがそのことは、アランが戦争から目をそらせるために哲学や芸術に逃げ込んだということを意味するものではない。その反対に、これらは戦争を生きたアランが戦争を語らずに戦争を論じた書物、あるいは哲学や芸術を通して戦争を考察した書物であると言っても過言ではないのである。『戦争の思い出』の中で、アランはこう書いている。「信者が祈りを行うように、私はデカルト賛美に取り組んだ。〔……〕それは『八一章』の中にあって、私を喜ばせるものだ。私はその中にまだ火薬臭を嗅ぎつけるが、恐怖はもはやない。[25]」事実、この哲学書にさりげなく書き込まれた次のような言葉を見出すとき、われわれは戦場で戦争の現実に呑み込まれそうになりながらも、デカルトを拠り所として思索を続ける哲学者兵士の姿を想像せずにはいられない。「私はこの主題〔＝戦争〕は避けて通りたかった、というのもそれを始めたら全頁を費やさねばならないからだ。だが私の考えのすべてを占めているのがそれだ。そしてこの本全体が戦争についての思考に過ぎないともいえる〔……〕。[26]」アランにとって哲学は、戦争に思考が浸食されないための防波堤であると同時に、戦争を特殊で例外的な状況としてではなく、人間学的な問題として認識するための方法なのである。

これらの書物に一瞬顔を出す戦争の主題は、それゆえ「火薬臭」のような生々しさとともに感じ取られるものである。アランは戦場でどのような戦争を見ていたのだろうか。上記に引用した一節が含まれる『八一章』の「暴力について」と題された章から引用しよう。

戦争はあらゆる情念の終着点であり、また、その解放のようなものである。それゆえあらゆる情念はそこに向かう。ひとつひとつはしかるべき機会を待っているにすぎない。〔……〕このとき思考はもはや刺々しいものにす

ぎず、〔情念のせいで〕眠りが妨げられる。かくして自然の原因が、戦争の敵どもまでも戦争の中に投げ込んだ。〔……〕戦争の材料とはこのようなものだ。その形式を扱おうと思ったら、一冊の本では足りないくらいだろう。だがこの集合的情念の力に気づかない者がいるだろうか？　あらゆる怒り、つまり野心や病や年齢に関する怒りが、賛同と栄光を伴って、かくも見事に表明されるこの集合的情念の力に。また模倣と慎みが、最良の若者たちを戦争に投げ込むのを見ない者があろうか？　そして早熟な情念が最悪の若者たちをもっと手際よく投げ込むのを見ない者があろうか？[27]

この一節が示しているのは、戦場の現実ではなく、戦争を引き起こすことになった心的要因の分析である。批判の対象となっている「集合的情念」が、開戦当時に吹き荒れた愛国主義的言説の核をなすものであることは明らかだろう。すなわちアランが見ていた「戦争」は、ロランであれば世論の暴力と言ったであろうものに他ならない。『芸術の体系』で言及されているのもまた、戦場ではなく、むしろ戦争のイメージ、そしてそれが引き起こす情動的反応である。「軍人の舞踏」と題された章を見てみよう。

軍隊のパレードが、その美によって、演習と行進を行う者ども自身にまずは働きかけるものだということは、十分に言われているとは言いがたい。見事に調整された群衆の動きというものが、制服による統一性と相まって、もっとも感動的なスペクタクルであることは明らかだ。その展開のうちに示されるのは、人間の力、統制され、理に適った力そのものである。[28]

これに引き続き、「この芸術は、今日では唯一の大衆芸術かもしれない」と述べるアランは、美的ないしは感性的

な側面を指摘することで、戦争が人々を幻惑するそのやり方を明るみに出そうとしている。注目すべきは、この秩序だった動きが作り出す美によって「働きかけられる」のが、軍隊が大衆にとってのスペクタクルとなりうる場、すなわち銃後の社会であるという点であろう。というのもここでもまた、アランの視線がロランのそれと一致していることを確認できるからだ。もちろん哲学者として、アランがとる戦争批判のアプローチがロランのそれとはまったく異質のものであることは言うまでもない。しかしながら彼が芸術論というかたちで「戦争文化」の一側面を分析しつつ批判の矛先を向けた「戦争」とは、ロランにとっての戦争がそうであったのと同様に、精神の隷属状態であったのではないだろうか。

ロランが『クレランボー』を出版し、銃後における自らの戦いを振り返った翌年、アランもそれまでの「戦争文化」批判と戦場での経験に基づく思索を総合した戦争論、すなわち『マルスあるいは裁かれた戦争』を発表した。二人の知識人は、戦争体験を総括する時期においても一致を示している。アランの戦争観が凝縮されたこの著作の全体像を検討することは、本稿の枠組みを大きく超えているため、ここではアランの思考のスタイルが典型的にあらわれている一節を引用するにとどめよう。以下は「メカニズム」と題された断章の一部である。

戦争は情念（passion）に他ならず、それはこの見事な言葉のもつあらゆる意味〔「情熱」と「受身」〕でそうなのであるが、この点〔情念がメカニックな動きに過ぎないこと〕は、戦争に固有の展開、つまりメカニックな展開がはっきりとさせてくれるだろう。だがそれを理解するためには実際に戦争を目にすることが必要だった。想像するだけであれば、叙事詩が全体についての思考とともに戻ってきてしまう。実際に戦争を行った者たちは、戦争の現実が職人仕事にきわめて近いと述べるようになった。それゆえはじめは花開いていた想像上の美徳は、人が物へと変えられるこの荒々しい機械の動きによって、たちまち萎れてしまう。興奮した心は見境なく戦争を嫌悪し、

怖れ、賛美し、切望するのだが、いざ間近に近寄ってみると、すべてが均一化し、ささいな行動が重要性を帯びてすべてが矮小化してしまう。すべては工場内でのように進行する。工場での目的は生産にあり、なぜ生産するかは決して問題にされず、また、分業のため、一人一人は生産の目的さえ忘れてしまう。ひとたび戦闘がはじまるや、超越的な目的などは、このメカニズムには異質なものとして吹き飛んでしまう。このメカニズムは、何もなくとも、勇気すらなくとも機能するように調整されている。物質的手段がまったくもってすべてを支配するため、弾薬が到着すれば兵士たちの活力が呼び覚まされ、逆に欠乏すればたちまち武装平和の考えや哲学的な無関心が広がってしまう。こうしてすべては外的なものに支配されるから、魂がやせたり太ったりするのも、言ってしまえば、物量の干満に応じるわけだ。ここではアルコール、ワイン、牛の枝肉が、はびこっている物質主義のたくましい象徴となる。[29]

戦争を内的体験として生きつつそれを抽象化しえた希有な思考が、ここには展開されている。このようにアランは戦場経験を自らの哲学的体系の中に位置づけることで、戦争の、さらには「戦争文化」の脱神話化を徹底的に行ったのであった。

（関西学院大学准教授・仏文学）

1 ロランは一八六六年、アラン、本名エミール＝オーギュスト・シャルティエは一八六八年に生まれている。

2 晩年のアランを訪ねた桑原武夫は、この哲学者の印象を次のように記している。「大男、これが先ず受ける感じである。ノルマンは大きいというが、私はこれほどがっしりしたフランス人をかつて見たことがない。樵夫の如しと言った人もある。」（桑原武夫『フランス印象記』、講談社学術文庫、一九七七年、二九頁。）

3 Maurice Barrès, *Les Diverses Familles spirituelles de la France*, Émile-Paul Frères, 1917, pp. 2–3.

4 Rémy de Gourmont, *Pendant l'Orage*, *Mercure de France*, 1926 (1915).

5 Christophe Prochasson, Anne Rasmussen, *Au nom de la patrie*, Éd. de la Découverte, 1996 に引用。

6 *Ibid*.

7 「戦争文化」については以下の論文を参照。Stéphane Audoin-Rouzeau, Annette Becker, 《Violence et consentement: la 《culture de guerre》 du premier conflit mondial》, in Jean-Pierre Rioux, Jean-François Sirinelli (dir.), *Pour une histoire culturelle*, Seuil, 1997, pp. 251–271.

8 ベルナール・デュシャトレ『ロマン・ロラン伝』、村上光彦訳、みすず書房、二〇一一年、一八〇頁。

9 同書、一九七―一九八頁。

10 ロマン・ロラン『社会評論集』（ロマン・ロラン全集一八）、宮本正清他訳、みすず書房、一九五九年、三三頁。

11 同書、一二頁。アッティラはフン族の王。大戦中にはドイツ人の野蛮さをこの民族と結びつけるカリカチュアなどが出回った。

12 「戦争の文学」（一九一五年四月一九日）、同書、八〇頁。

13 「戦いを超えて」（一九一四年九月一五日）、同書、二九頁（ただし訳文を一部変更した）。

14 「私を非難する人びとへの手紙」（一九一四年一一月一七日）、同書、五五頁（ただし訳文を一部変更した）。

15 「精神の独立宣言」、同書、三〇六頁（ただし訳文を一部変更した）。

16 ただし執筆は一九一六年に開始されている。

17 ロマン・ロラン『クレランボー』、宮本正清訳、『小説集』（ロマン・ロラン全集八）、みすず書房、一九五一年、二七五頁。

18 同書、二七三頁。

19 Alain, *Propos*, II, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1970, pp. 360–361. 七月二八日は執筆の日付である。プレイヤッド版の注によると、このテクストは八月一日の『デペッシュ・ド・ルーアン』紙に掲載予定だったが、状況がアランの分析を追い越してしまったために当時は発表されなかったとのことである。

20 *Ibid.*, pp. 361–363.

21 *Ibid.*, pp. 363–364. プレイヤッド版の注釈者は、このテクストが七月三一日に書かれたと推測している。

22 *Ibid.*, pp. 364–365.

23 Alain, *Souvenirs de guerre*, in *Les Passions et la Sagesse*, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1960, p. 475.

24 Alain, *Propos*, I, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1956, pp. 189–190.

25 Alain, *Souvenirs de guerre*, *op.cit.*, p. 503.

26 Alain, 《De la violence》, *81 chapitres sur l'esprit et les passions*, in *Les Passions et la sagesse*, *op.cit.*, pp. 1215–1216.

27 *Ibid.*, p. 1215.

28 Alain, *Système des beaux-arts*, in *Les Arts et les Dieux*, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1958, p. 247.

29 Alain, *Mars ou la guerre jugée*, in *Les Passions et la Sagesse*, *op.cit.*, p. 568.（邦訳、アラン『裁かれた戦争』、白井成雄訳、小沢書店、一九八六年、三一—三二頁を参照したが、訳文は変更した。）

Deux intellectuels face à la Grande Guerre − Alain et Romain Rolland

Akihiro Kubo

La mobilisation des esprits est une caractéristique essentielle de la Guerre de 14-18. Nombreux sont les intellectuels qui, lorsque la guerre éclate, se sont laissés emporter par la ferveur. Se proclamer pacifiste à l'égard de ce déferlement de patriotisme chauvin revenait à aller à l'encontre de la《culture de guerre》qui s'imposait sur l'ensemble de la France belligérante. C'était effectivement le parti pris d'Alain et de Romain Rolland. Les deux intellectuels se sont distingués en prenant la même position à ce moment crucial de l'Histoire. Or, cette coïncidence est d'autant plus remarquable qu'ils ont choisi deux stratégies contrastées pour mettre leurs idées pacifistes en œuvre.

Rolland a choisi de s'engager en tant qu'intellectuel alors qu'il ne s'était guère manifesté sur le plan politique avant le conflit. A côté de ses activités au service du Comité international de la Croix-Rouge, il commence dès le début septembre 1914 à publier des articles dans lesquels il condamne la guerre comme un malheur pour l'Europe entière et s'exprime en faveur de la réconciliation des deux nations sœurs que sont la France et l'Allemagne. Pour Rolland, cette guerre n'a pas seulement donné lieu à des combats sur les champs d'honneur. Elle a créé également et surtout un《front》en arrière −*the home front*− où les intellectuels de deux camps se lancent dans la guerre des mots. Il s'agit donc d'intervenir dans l'《opinion》pour incriminer l'《agitation factice et forcenée》dans laquelle s'entretiennent les civils (*Au-dessus de la mêlée*). C'est dans cet objectif que Rolland, face aux intellectuels nationalistes qui le vilipendent, se fait *dissident* dans la《culture de guerre》.

Alain, quant à lui, a choisi de s'engager dans l'armée. Il en explique les motifs en ces termes:《Je m'enfuis aux armées, aimant mieux être esclave de corps qu'esclave d'esprit》(*Propos d'Alain*). Tout comme Rolland, Alain s'est rendu compte que la guerre a attisé le fanatisme des intellectuels, mais, contrairement à l'auteur d'*Au-dessus de la mêlée*, il ne s'est pas mêlé à la guerre des mots. Effectivement, c'est à des réflexions sur la philosophie et sur les arts qu'il se livre sur les champs de bataille, ce qui aboutira à ces deux ouvrages que sont *81 chapitres sur l'esprit et les passions* (1917) et *Système des beaux-arts* (1920). Il mettait ses activités intellectuelles à l'abri de la tyrannie de l'《opinion》. Or, ce que le philosophe voulait également en se rendant volontairement《esclave de corps》, c'est de vivre la guerre, car celle-ci, s'imposant pour lui comme une question anthropologique, doit, pense-t-il, être considérée à travers ses propres expériences. Sous cet angle, on trouvera dans les méditations sur la philosophie et sur les arts des réflexions sur la guerre. Ce sujet est traité sous le rapport de la《passion》qui est un concept clé de la pensée d'Alain.

Ce sont dans les années d'après-guerre que les deux intellectuels ont fait le bilan de leurs expériences de la guerre. Rolland, devenu porte-parole du mouvement pacifiste, a publié *Clérambault* (1920) qui est en réalité un《roman à thèse》. Le romancier y retrace le parcours d'un intellectuel qui, seul, affronte l'《opinion》patriotarde. Alain, lui, fait paraître un traité intitulé *Mars ou la guerre jugée* (1921). Dans ce livre qu'il qualifie de《pamphlet》contre la guerre, le philosophe-combattant a donné une synthèse de ses expériences et réflexions. Ses analyses extrêmement fines sur les comportements des hommes face à la guerre ont également pour objet de démanteler certains mythes qui caractérisent la《culture de guerre》.

村上光彦氏を偲んで

永田和子

　村上光彦氏は一九五三年東京大学文学部仏文科卒業、東京学芸大学を経て一九六五年成蹊大学助教授、のち教授、一九九七年定年を迎えて名誉教授となられる。第二次世界大戦関係の文献、ノーベル平和賞作家エリ・ヴィーゼル、ロナルド・D・レインなどのほか英語文学も翻訳、大佛次郎氏の「パリ燃ゆ」執筆時におけるフランス資料収集、翻訳に貢献、のち大佛次郎研究会会長も務められた。

　村上光彦氏に、はじめてお目にかかったのは一九五四年、昭和二九年六月、日本フランス文学会に出席のための宮本正清先生のご上京に合わせて、「ロマン・ロラン友の会」が東京都練馬区清水町の片山敏彦先生ご自宅で開かれた時である。蛯原徳男先生も同じ清水町にご自宅があったので、大阪からお帰りになられて、宮本、片山、蛯原の三先生および参会者の集合写真が残っている。清水茂氏の姉上、安西良子さんが名カメラマンであったことは僥倖であった。この会が終えて蛯原先生のご自宅の留守番役、山口三夫氏の部屋で二次会があり、誘われて私も同席させていただいた。テイヤール・ド・シャルダンの研究者、美田稔氏は、所用のため中座された。村上光彦氏も残られて、私は始めて片山山脈の俊秀の卵たちにお目にかかったわけである。東京では月に一度、発表者がテーマを持って発表する集まりがあり、片山先生も出席されて最後に助言をしてくださった。村上氏は

「シャルル・ペギー」の発表をなさった。
片山敏彦先生没後、先生を偲ぶ会は度々開かれ、村上氏は必ず出席なさった。なにしろ長身でいらっしゃるから、どの写真でも頭だけ突き出ていられる。「片山敏彦文庫の会」にも執筆、役員をしてくださった。お洒落なのだろう。裏皮のコートを召しておられたこともある。
高知県立文学館開館一周年記念展は「片山敏彦生誕百年記念」として内容の濃い実物ばかりの展示であった。そのカタログに「ロランの友、片山敏彦の抵抗」の題目でご執筆くださった。
高知で日本フランス文学会が開催された時、先の夫人と共に来高され、片山先生のお墓詣りをなさった。お二人はいつもご一緒でデュシャトレ夫妻来日の折は、ロラン研究所や京都日仏会館で村上氏は通訳の大役を果たされた。敦子夫人亡き後、京都生まれの萩原葉さんと再婚されたが、葉さんは慶應仏文出身で朝日新聞記者をつとめた後、パリ・アンスティテュ・カトリックで仏語を修得されている。村上氏にとって良き片腕となられたと思う。
ロマン・ロラン像を作成した高田博厚氏の帰国を迎えて、雑誌『同時代』同人として、矢内原伊作・宇佐見英治・安川定男・清水茂氏らと雑誌の編集・執筆と、その広範な文化活動にも深く係わられた。

村上光彦　略歴

長崎県佐世保生まれ。一九五三年東京大学文学部仏文学科卒業。東京学芸大学を経て一九六五年には成蹊大学助教授、のち教授、一九九七年定年となり名誉教授。
第二次世界大戦関係の文献、ノーベル平和賞エリ・ヴィーゼル、ロナルド・D・レインなどのほか英語文学も翻訳、大佛次郎研究など多彩な活動を行った。大佛次郎研究会会長も務めた。
二〇一四年五月二二日、呼吸不全のため死去。八五歳没。

著　作

『エジプトの神話』宝文館（中学生世界神話全集二　エジプト編）一九五九
『エジプト神話の口承』鷺の宮書房　一九六八
『大佛次郎──その精神の冒険』朝日選書　一九七七・八
『鎌倉幻想行』朝日新聞社　一九八六・五

『鎌倉百八箇所』用美社　一九八九・四

『パリの誘惑　魅せられた異邦人』講談社現代新書　一九九二・七

『イニシエーションの旅──マルセル・ブリヨンの幻想小説』未知谷　二〇一〇・一二

翻　訳

『ドゴール大戦回顧録』全六巻　みすず書房　一九六〇─一九六六。第二回ポール・クローデル賞　一九六八

『夜』エリ・ヴィーゼル　みすず書房　一九六七・九

『死者の歌』エリ・ヴィーゼル　晶文社　一九七〇・一

『夜明け』エリ・ヴィーゼル　みすず書房　一九七一・六

『昼』エリ・ヴィーゼル　みすず書房　一九七二・一〇

『偶然と必然　現代生物学の思想的な問いかけ』ジャック・モノー　渡辺格共訳　みすず書房　一九七二・一〇

『結ぼれ』R・D・レイン　みすず書房　一九七三・一

『砂の荷物』アンナ・ラングフュス　晶文社　一九七四・一

『好き？　好き？　大好き？　対話と詩のあそび』R・D・レイン　みすず書房　一九七八・二

『人類学者と少女』A・シュルマン　岩波現代選書　一九八一・二

『日常性の構造1・2　物質文明・経済・資本主義　一五─一八世紀』フェルナン・ブローデル　みすず書房　一九八五

『意識ある科学』エドガール・モラン　法政大学出版局・叢書ウニベルシタス　一九八八・四

『歴史写真のトリック　政治権力と情報操作』アラン・ジョベール　朝日新聞社　一九八九・一〇

『フランスのお話一・二』アンリ・プーラ　用美社　一九九〇・三

『そしてすべての川は海へ』エリ・ヴィーゼル　朝日新聞社　一九九五・三

『世界時間1・2　物質文明・経済・資本主義　一五─一八世紀』フェルナン・ブローデル　みすず書房　一九九六─一九九九

『しかし海は満ちることなく』エリ・ヴィーゼル　平野新介共訳　朝日新聞社　一九九九・一一

『幻影の城館』マルセル・ブリヨン　未知谷　二〇〇六・九

『砂の都』マルセル・ブリヨン　未知谷　二〇〇七・四

『旅の冒険──マルセル・ブリヨン短篇集』マルセル・ブリヨン　未知谷　二〇一一・六

『ロマン・ロラン伝』ベルナール・デュシャトレ　みすず書房　二〇一一・一二

他多数

ロマン・ロランと自筆蒐集

植松晃一

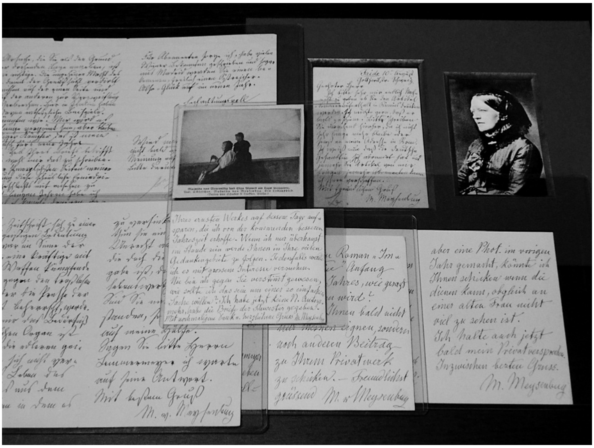
ロマン・ロランが「第二の母」と呼んで慕ったマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークの自筆書簡を入手しました。ロランと交流を始めた一八九〇年代に書かれたもので、ロランと同世代の若い作家に宛てたものです。一部を翻訳し、私個人のブログ「読ナビ!」で紹介しました。

ロランにも敬愛する人物の自筆を集める蒐集家としての一面がありました。片山敏彦は次のように綴っています。

「ロマン・ロランはユマニストである。ユマニストには種種な意味が含まれている。辞書を開けてみると人本主義者、古典学者、人道主義者、古文蒐集家などの意味がある(中略)最後の古文蒐集家の概念は、多分ロランの唯一の蒐集癖であるところの、古今の文化的偉人らの手蹟を集めている事実に当てはまる」

ロランの日記や書簡集をひもとくと、偉人の自筆に関する記述が所々に見られます。

一八九一年、二五歳の誕生日にマルヴィーダからベートーヴェンの自筆を贈られたロランは、その喜びを母に綴っています。一八九二年に書かれたマルヴィーダへの手紙では、ワーグナー自筆の手紙を手に入れたことを知らせています。一八九九年のドイツ旅行では音楽関係の蒐集家を訪ね、ベートーヴェン、バッハ、ハイドンなど巨匠の自筆に魅せられており、一九〇六年の英国旅行で



入手したマルヴィーダの自筆書簡

訪れたシェイクスピア博物館では、シェイクスピアの自筆が所蔵されていないことを嘆いています。

　ロランの友人で稀代の蒐集家としても知られた作家のシュテファン・ツヴァイクは、一九一三年の日記に、ロランがトルストイやニーチェの自筆を見せてくれたと書き残しています。一九二三年にロランがツヴァイク家に逗留した際には、ツヴァイクが集めた「あらゆる時代の最大の巨匠たち」の自筆コレクションに見入っていたそうです。ロランが偉人の自筆に並々ならぬ興味を抱いていたことは確かでしょう。

　一九二〇年代半ば以降、ロランはヴィラ・オルガを訪ねてくる世界の友人にも秘蔵の品々を披露しています。米国のL・プライスや片山敏彦、上田秋夫らがその模様を活字に残していますが、中でも片山の随筆「ヴィラ・オルガの思い出」はロラン・コレクションの概略を伝えており、貴重な報告だと思います。それによれば、ベートーヴェンの交響曲第七番の自筆譜やゲーテの描いた水彩画、ライプニッツやカントの原稿、モーツァルトやナポレオンの手紙等々、ロランらしい充実した内容だったようです。遠来の友人と人類の精神的な遺産を共有することが、ロラン流の「おもてなし」だったのかもしれません。

　生命のない遺物を嫌ったロランが、これら偉人の自筆にどんな意味を見いだしていたのでしょうか。ドイツ人

女性エルザ・ヴォルフに宛てた一九〇八年の手紙には、次のように記されています。

「もしベートーヴェンの草稿が私の手に入ったら（残念ながら私は彼の領収書を一枚もっているだけです）、それとも大芸術家の貴重な記念品の何かが手に入ったなら、私はそれを、プロシア国王にも、共和国大統領にも、アカデミーにも、図書館にも遺贈したりはしません。私はそれを一人の芸術家にあたえましょう、将来、同じようにするという条件で。――芸術は私たちの富、私たちの王国、私たちの遺産です。私はそれが野蛮人の手に渡るのを許しません」

時代を超えて流れ着いた手紙や草稿などの自筆類は、時間の彼方に没した偉大な魂の肉声を今に伝え、創造の閃きを再現するタイムカプセルです。歴史家・研究者として、ロランにはそうした史料を大切に思う気持ちがあったでしょう。でもそれ以上に、ロランにとって人生の「道づれ」である巨匠たちの自筆は、聖遺物だったのだと思います。ツヴァイクの言葉を借りれば、「畏敬にあふれる宗教的感情をかきたたせる」ものといえるかもしれません。

自筆の蒐集について書かれたロランの文章や、ロランと蒐集をテーマにした資料等をご存じの方がいたら、ご教示いただければ幸いです。

（賛助会員・一九八〇年生まれ）

参考文献

清水茂編『片山敏彦　詩と散文』小沢書店
みすず書房『ロマン・ロラン全集二六』所収「ドイツ旅行・イギリス旅行」山口三夫訳
みすず書房『ロマン・ロラン全集三二』所収「マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークへの手紙」宮本正清・山上千枝子訳
みすず書房『ロマン・ロラン全集三三』宮本正清・山上千枝子訳
みすず書房『ロマン・ロラン全集三七』所収「フロイライン・エルザ」宮本正清・山上千枝子訳
藤原和夫訳『ツヴァイク日記』東洋出版
河原忠彦『シュテファン・ツヴァイク』中公新書
原田義人訳『ツヴァイク全集』一九・二〇　みすず書房

「第一次世界大戦下の知識人――アランとロマン・ロラン」の講演を聴いて

井土真杉

一一月一日の講演について、即興曲的（いきなり）で、幻想曲的（とりとめない）な感想ですが…

短い時間でしたが、興味深い資料とともに充実したお話で感銘いたしました。

また講演後の多くの方の発言も含めて、いろいろのことを考えさせられました。

その自分の感想を大きく括るとすれば、第一次、第二次大戦、そして現代の、世界と日本の知識人、民衆、政治のありようとの関連で感じたこと、と言えましょうか。

まず、アランの戦争へのかかわり方ですが、（非難する意味ではありません）、彼が大戦に志願して参加したということを初めて知りました。当時フランスでは徴兵されたわけではなく、バルビュス、ペギー、ラヴェルなど芸術家たちも憑かれたように志願兵となったと聞きます。第一次大戦の「塹壕戦」に象徴される悲惨さは歴史的な語り草になっていますが、アランはその生々しい体験を語らず、皮肉っぽい戦争一般への考察しか書かなかったことを何か歯がゆく感じました。「モラリスト」とはそんなものなのでしょうか？

ロランも戦争の暴力性、破壊性、大衆の狂信など非人間的な側面を、いわば心の問題として強く憎みましたが、いっぽう戦争のよって来る原因、政治・経済の側面についてもかなり深く考えた（「チボー家・一九一四年夏」ほどでないかもしれませんが）人だったと思います。今回のようなテーマでは、近代の戦争への社会科学的な視点の論議も一定はあった方がいいのではないかなどと愚考しました。

戦争を起こすためには、民衆の狂信的なナショナリズム、愛国主義の昂揚が不可欠ですが、近代の日本では、

加えて天皇制と国家神道という特有のものがからんで、より複雑化していると思います。ロランの薫陶を受けて「人間の愛と尊重と魂の自由」を謳歌していた高村光太郎も、戦時のサイレンが本能のように「私を宮城の方角に向けた」と告白しています（詩集『暗愚小伝よりロマン・ロラン』）し、現代日本の右派の靖国へのこだわり、侵略戦争美化もそれを引きずっているものでしょう。

その点、日露戦争の時代に、

（…）すめらみことは戦ひに／おほみづからは出でまさね／かたみに人の血を流し／獣の道に死ねよとは／大みこころの深ければ／もとよりいかで思されむ（…）

と歌った与謝野晶子は大したもんだと思ったり。

フランスとドイツの因縁について発言されたフランス人のかたの話は大変興味深く、そういうこともあるんだなと感心しました。一方、やはりいまのEUの苦闘、仏独共通の歴史教科書の使用などを、現在のわが国、とりわけ安倍政権下の日本と中国、韓国の関係と比べて考えると、実にすばらしいことだと感じざるを得ません。

ロランのような偉大な文豪、平和主義者・活動家の後継者はいまいないのか、という意味の発言もあり、考えさせられました。たしかに現代は東西とも、文学者に限らず、政治家その他、すべて指導的人物も小粒になっているような気がします。いい悪いは別にして、レーニン、スターリン、チャーチル、ヒットラーなどというような歴史的政治家や、ガンジー、チャップリンその他、二〇世紀前半までは、世界に多大な影響を及ぼすような大物がいましたのに。現代のあらゆる分野での専門の細分化、高度の情報社会化がそうしたのでしょうか。

ただこうも思います。ロランなどはたくさんの城門をもった巨大な都市のような存在なので、それをそのまま引き継ぐことは不可能だ。でもその一つの門である、平和主義、非暴力の精神を一例にとるならば、それは時代に応じて世界各地で引き継がれ発展しているのではなかろうか。日本では例えば「9条の会」というような形で、などと考えてみました。

（二〇一四・一一・四）

『ピエールとリュース』を観劇して
――アトリエ劇研三〇周年記念公演――

中田裕子

昨年秋、館主の自宅をプロデューサーと訪ねた。劇場三〇周年を記念して先生の翻訳作品を上演したいと考えています。どの作品の上演を望まれますか。私たちがそう尋ねると、先生は書斎に入られた。ドアの隙間からは、広い部屋を所狭しと埋め尽くしている、書棚と蔵書がみえた。しばらくして、一冊の本を手にでてこられた。少し震える手で、差し出されたのが「ピエールとリュース」であった。この本は先立った友と書いたものです。か細い声で、私に託された。

――演出より

上演一ヶ月前のワークショップで、演出のあごうさとしさんは、次のように話された。

「このような純粋な愛が今の世代にわかるかどうかと思いますが、九〇歳を過ぎられた波多野先生から託された気持ちを大切に演出したいと思っています。」

私は「ピエールとリュース」のいろんな場面を思い浮かべながら、どんな舞台になるのかしらと、期待でわくわくしながら早く観たいと思いました。

原作　ロマン・ロラン「ピエールとリュース」
脚色　波多野茂彌・小島達雄
演出　あごうさとし

一一月一三日から一八日までアトリエ劇研で上演された。

そこで私は一六日と最終上演の一八日の二回観劇することにしました。

一九一八年一月三〇日水曜日の晩から三月二九日の聖金曜日までの物語です。

舞台はピエール家の居間だけで進行。炊飯器、ジャー、リモコン式テレビや携帯電話など、今の私たちと変わり

ない生活をされていました。
　人間らしさを失わせる戦時下でのピエールとリュースの出会いと純粋な愛。まもなく戦場に召集されるピエール、戦場から数日の休暇をもらって帰宅している兄フィリップと息子を戦場に送っている父、三人の戦争に対するそれぞれの意見や考えなどの会話。
　約一〇〇年の時が過ぎ、大きく変化した文明と不変の愛と戦争、これらのことがうまく調和されていて、遠い昔に書かれたロマン・ロランの世界を身近に現在進行している出来事のように感じ、私はどんどん物語の中へひきこまれた。そしてあっと言う間に時間が過ぎ去っていった。
　サン・ジェルベ教会でピエールとリュースが愛を誓いあっていたその瞬間に爆撃され、巨大な大理石の柱が彼らの上にどっと崩れた。この最後の場面の感情をおさえた抑揚の少ない朗読は、ぐっと心に沁みこみ胸がいっぱいになった。
　舞台が終了しても、だれも動こうとはせず、しばらく感動の静寂が漂っていた。ライトがつき出演者が舞台に並ぶとわれに返ったような大きな拍手。周りを見ると観客の大部分は感動した表情の若い人たちである。現在の場面設定と不変のテーマを組み合わせてテンポよく表現していたので若い人たちにも素直に受け入れられたのだろうか。
　私の大好きなロマン・ロランの作品「ピエールとリュース」が、今、こんなふうに蘇り、いろんな世代の人々に感動を与えられたことがとてもうれしかった。
　今日で舞台が終わりだとさみしい気持ちで入り口を出ると、そこにピエールとリュース役の人が立っていた。
「すごくよかったです。ありがとう！　何度でも観たいからまたいつか上演してほしいです。」
と話しかけると、ピエールが
「ぼくももっとやりたいです、あごうさとしさんに頼んでください。」
と元気な声が返ってきた。
　ピエールとリュースのそれぞれの役をやり切ったとい

う充実した表情が印象的だった。

私は感動に浸り、そして「ピエールとリュース」を友の思い出とともにずっと大切にされてきた波多野先生のことを思いながら、一一月の夕暮れの寒い風の中を停留所へ向かった。

パリ便り

シッシュ・由紀子

シャルリー・エブド襲撃と共和国の行進

二〇一五年は衝撃的な幕開けとなりました。一月七日、シャルリー・エブド誌が襲撃され、それに続く数日の間に、警官、ユダヤ教食材スーパーの客など、一七人がイスラム過激派を名乗る三人のテロリストに殺害されたのです。アラブ・アフリカ系とはいえ、容疑者がいずれもフランスで生まれ育っていたことに、国民は一層の衝撃を受けました。

事件を巡る日本での報道を見ると、テロ行為を弾劾しながらも、風刺画そのものの評価や「表現の自由」といった、襲撃事件のいわば下流にある事象ばかりが争点になり、西洋の価値観の押しつけだと反発し、他者の感情に「配慮」せよという日本的規範を持ち出して結論とする日本的価値観の再確認のために書かれたような記事やコメントが多いように思います。

「共和国の行進」で、四〇〇万人ものフランス人が通りを埋めたのは、シャルリー・エブドの風刺画を擁護するためではありません。シャルリー・エブドは、五月革命の流れを汲む人気風刺画家たちを抱えながらも、時流の変化と共にマイナーな週刊誌になっていました。「表現の自由」を翳してやりたい放題だった訳でもなく、これまで、何度も訴訟を起こされ、負ければ民主主義国家の法に従って制裁を受けてきました。今回の事件では、それが「イスラム法」に則って抹殺されたのですから、これは国家の根幹を揺るがす事態です。

二〇〇年以上も前に、ボルテールら啓蒙思想家は「狂

信的信仰」を弾劾し、フランス革命は「王権神授説」を背景とする王政を倒しました。そもそも、フランス語の「自由」とは、個々の人間が、「神」に依らずに自分で決めることを指します。

経済のグローバル化や個人の価値観の多様化で社会や国家の枠組みが薄れ、フランスでも、国の「アイデンティティー」を巡る論争がメディアを賑わせていた矢先に今回の襲撃事件が起きました。惨劇を前に、フランス国民に脈々と流れていた「不敬の精神」が目覚め、「ライシテ（政教分離）」に基づく「共和国」の理念を再認識したからこそ、歴史的な国民的結束となったのでしょう。

さて、事件の「上流」にはイスラム過激派勢力がいます。程なくして、日本も名指しで脅される事態になってしまいました。日本人殺害の理由は、日本が「十字軍」に加担したというものです。二一世紀に、一〇〇〇年前のアラーの聖戦士たちの亡霊と対決することになろうとは…

現代に蘇るロマン・ロラン

死後七〇年が経過し、パブリックドメインに入ったロマン・ロラン（一八六六―一九四四）の著作の再版が相次いでいる。既に、二〇〇八年に『ジャン・クリストフ』（アルバン・ミッシェル社）、二〇一三年に『戦いを超えて』（パイヨ社）、二〇一四年に『ありし日の音楽家たち』（アクト・スュド社）[1]が再版されているが、二〇一五年はこの動きが加速しそうだ。

年明け早々『ベートーベンの生涯』（ジャン・ラコステの序文付き二二〇ページ、バルティャ社）が書店に並んだ。一九〇三年、シャルル・ペギー主宰の『カイエ・ド・ラ・カンゼーヌ』で発表した評論で、「私が『英雄』と呼ぶのは、（思想や力ではなく）心が偉大な者たちだけだ。」という言葉が有名だ。[2]

ちなみに、昨年、シャルル・ペギー友の会は、ペギー没後一〇〇年記念事業として、国立印刷所のアート・版画本アトリエと共同で『カイエ』一五冊の復刻版を二五〇部限定で制作し、二〇一五年一月から二〇一六年末の間に配本予定だ。一九〇〇年から一九一四年の間に発行

された全カイエの内、各シリーズから一冊ずつ厳選された一五冊の中に『ベートーベンの生涯』も入っている。[3]

没後、アルバン・ミッシェル社から発行された『ペギー』も、高等師範学校哲学学部長マルク・クレポンの序文付き四五〇ページで、ラ・デクベルト社から、[4]『リリュリ』（一九一九）と『機械の反抗』（一九二二）も、オ・タン・ド・スリーズ社から既に再版されている。[5]

今後のプロジェクトとして、ウィキメディア・フランスは、ブック・スキャナーという機械で『道連れたち』（一九三五、アルバン・ミッシェル社）の抜粋をデジタル化し、ウィキソースでオンライン公開する予定。[6]

また、レ・シャン・ガルニエ・コレクションは、日記と書簡を除く、文芸作品・政治的考察・戯曲・音楽評論に関する全ての作品を扱った『ロマン・ロラン全集』の再版プロジェクトを一〇年程の長期的なスパンで展開する方針らしい。[7]

こうした出版界の動きに呼応するように、二〇一五年一月一六日から三一日の間、第一回「パブリック・ドメイン・フェスティバル」が開催され、一月三一日には、パリ第八大学にて、半日にわたり、ロマン・ロランに関する一連の発表があった。[8]

デジタル技術により、迅速で広範囲な伝播が可能となった今日、前世紀の偉大な思想家の言葉に第二の命が吹き込まれ、混沌さを増す世界に新たな光を投げかけてくれることを願って止まない。

1 http://www.actes-sud.fr/catalogue/musique/musiciens-dautrefois
2 http://www.editions-bartillat.fr/fiche-livre.php?Clef=399
3 http://www.charlespeguy.fr/news/157
4 http://www.editionsladecouverte.fr/catalogue/index-Peguy-9782359251005.html
5 http://www.fontaineolivres.com/livre-liluli-suivi-de-la-revolte-des-machines,2634.html
6 http://festivaldomainepublic.org/romain-rolland-31-janvier.html
7 http://www.lejdc.fr/nievre/actualite/2014/12/26/l-uvre-de-romain-rolland-entre-dans-le-domaine-public_11269567.html
8 http://festivaldomainepublic.org/romain-rolland-31-janvier.html

山口俊章先生の訃報を聞いて

上西妙子

九七年の夏、「アラゴンの世紀」会議に出席のためパリに滞在中の山口先生から頂いた葉書を、今も大切に持っている。コピーをして、学生たちに読ませもした。人間が作った最も美しく、また最も人間くさい都会と先生がされるパリ、そのバスティーユ界隈にあって、議論の果す大切さが心身に迫る日々を過ごしていると先生は書き送って下さった。また、自然に逃れない知性の重みが、街頭でも真剣に繰り広げられていることに感動するともあった。

それより一五年も前に初めてお会いしたころ、先生が言われたことを私は忘れていない。フランス文学を研究すると決めたのなら、その最良の部分を考えつづけること、そのために、日本的な曖昧な知の土壌に埋没してはならないということである。

山口先生を思い出すとき、中世のミニアチュールの背景に見られる、あのきれいな空色が広がる。地の糧の愉しみの時、そして友愛の会話を分け持たせて下さった先生の上には、いつもきれいな水色の空があった。

短信

＊みすず書房　世界的経済書『21世紀の資本』を翻訳・出版。ベストセラーになっている。トマ・ピケティ氏を日本に招き、格差社会に議論を呼ぶ。

＊重本恵津子さん　一九九三年と九四年続けて『魅せられたる魂』をロマン・ロランセミナーで語ってくださいました。演出家蜷川幸雄氏が二〇〇六年創設した五五歳以上限定のさいたまゴールドシアターのプロ劇団員となられ、昨年「鴉よ、おれたちは弾丸をこめる」を地元並びにパリ公演をされパリ市民にも感動を与えた。最高齢八九歳で重本さんは主役を演じた。高齢社会の現在の人生の師でもある。

＊沖本ひとみさん　八〇歳を記念して「今の私！喜びと共に」～沖本ひとみと若き仲間たち～を大阪いずみホールで一一月開催。二〇〇三年には故尾埜善司前理事長とロラン作品の音楽をピアノで再現。

＊黒柳大造さん　ホームページで拝見する限りですが『ロマン・ロラン伝』の読書会は順調な御様子でなによりです。最近は京都にうかがう機会がめっきり少なくなってしまいましたが、一一月の久保先生の講演会は聴講にうかがいたいと考えております。なお、今年も成瀬正一研究家である石岡久子先生から「成瀬正一日記」の翻刻（香川大学紀要「国文研究」からの抜粋）が届きましたのでコピーを同封します。

＊山口千鶴さん　読書会から帰宅後、改めて『魅せられたる魂』を、ボツボツ読み返しています。自然に二〇代、三〇代の頃を思い出してしまいます。当時の私は、行動や思考（と言える程のものでないにしても）は、アンネットと共に過ごしていましたので、懐かしくまたも涙がとまりません。また、改めて考えると(当時も思っていましたが)、「アンネットの人生」を示してくださった翻訳者の宮本先生の、感性と情熱と力量は、私や私たちにとって最高の恵みであったと心から感謝しています。もし『魅せられたる魂』に出会わなければ、私の越し方は違っていたとつくづく思います。

＊月ヶ洞晶子さん　私今、『魅せられたる魂』を読んでいます。初めの一〇〇ページ位は少ししんどかったのですが、「夏」はどうして男性がこれを書けたのだろうかと不思議な感覚を受けました。もちろん全ての作家が女性を書くわけですが、今迄思いもしなかった感覚を持ったわけです。遠い学生時代一冊読んで（多分「アンネットとシルヴィ」だけだと思います）頓挫してしまった記憶がありますが、今度は読んでからロマン・ロラン研究所に行くという目標を持って頑張ります。（有馬通志子さんご長女）

† 訃報 †

蜷川　譲さん

七月九日、誤嚥（ごえん）性肺炎で死去、八九歳。元日本福祉大学教授。二〇〇二年、ロマン・ロランセミナーで「ロマン・ロランの後継者たち」と題してご講演くださった。一九五一年にロマン・ロラン協会を設立、機関誌『ロマン・ロラン研究』を発刊。

山口俊章さん

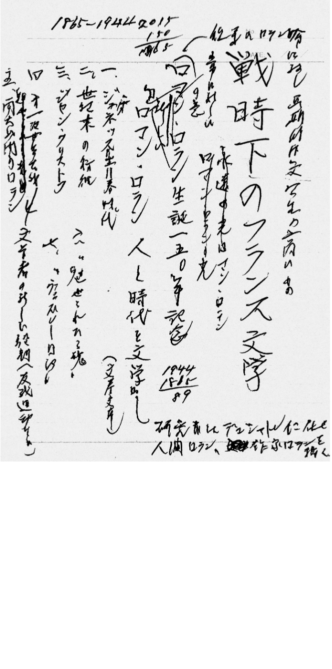
九月二六日、急性白血病に伴う肺炎のため死去、七八歳。大佛次郎研究会会長、元神戸大大学院教授。二〇〇六年、ロマン・ロランセミナーで「戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン」と題してご講演くださった。

山口俊章先生のご長男俊洋氏から次のようなご連絡がありました。

先月九月二六日、父が逝去いたしました。葬儀は、九月二八日、父の意向により、親戚縁者のみにて、執り行いました。

入院中、誰にも伝えないようにとの本人の意向を尊重したため、突然このような形でのご報告となりましたことを、何卒ご了承下さい。抗がん剤治療を受けながらも、仕事ができるかぎりはと、病室や自宅の書斎で『ブルボン王朝史』の執筆を続け、五月末には大佛次郎研究会の会長として、大佛とロマン・ロランに関する研究発表をしたのですが、その後、体調不良で入退院を余儀なくされるようになりました。死因は骨髄異形性症候群から急性白血病に移行した末、併発した肺炎です。八月二日に入院してから、帰宅することもかなわず、病室で最期の時を迎えました。父も、いま一度、フランスを、パリを、そして京都を訪ねたかったと思いますが、残念ながらかないませんでした。それでも最後まで、仕事に生きようとした、誇るべき父であったと思います。父が病室に残したメモ帳に記されたロマン・ロランに関するメモの写しを、訃報記事（神奈川新聞）とともに添付させていただきます。

末筆になりましたが、父が生前賜りましたご厚誼に、心より御礼申し上げます。



財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長　宮本　正清

ロマン・ロラン（一八六六〜一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、真に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を堕落と頽廃から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。

このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー　●講演会
　公開講座　●読書会・研究会
　●機関誌『ユニテ』発行

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また
●彼の周辺の芸術家たちに興味、
●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●**特典**＝①機関誌『ユニテ』の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●**会員**＝一般賛助会員は年会費一口五千円から。特別賛助会員は年会費十口以上。

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一

5・15　ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）　宮本　正清

11・27　苦悩のなかのインド　森本　達雄

一九七二

6・24　ロマン・ロランとフランス革命　波多野茂彌

一九七三

5・26　ロマネスク美術　ブルゴーニュ地方の教会を中心にして　高井　博子

12・18　私の人間観　末川　博

一九七四

6・29　私の通った芝居の道　毛利　菊枝

12・5　ロマン・ロラン没後三十周年記念――講演と音楽の夕べ　佐々木斐夫　演奏：玉城　嘉子

一九七六

7・11　ロマン・ロランとゲーテ　南大路振一

ユダヤ民族と西洋文明　岡本　清一

一九七七

2・10　中国文学とロマン・ロラン　相浦　杲

一九八九

4・20　ロマン・ロランの反戦思想と現代　加藤　周一

6・9　ロマン・ロラン全集と私　小尾　俊人

9・29　ロマン・ロランの革命劇から――フランス革命二〇〇周年の記念に　中川　久定

11・17　ロマン・ロランとの出会いから　尾埜　善司・今江　祥智

一九九〇

1・27　ロマン・ロランに負うもの――平和と音楽　新村　猛

6・2　ロマン・ロランとガンディー　森本　達雄

9・26　『魅せられたる魂』と私　樋口　茂子

10・26　占領時代における日本社会とロマン・ロラン　小尾　俊人

11・30　ロラン・片山・ヘッセ　宇佐見英治

一九九一

3・1　ロマン・ロランと私　松居　直

4・19　(財)ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念
レクチャー・リサイタル　杉田　谷道
〃ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ〃

6・4　ロマン・ロランとベートーヴェン　青木やよひ

9・27　ロマン・ロランとデュアメル　村上　光彦

10・25　ロマン・ロランの思想の二面性　兵藤正之助

11・29　初めにロマン・ロランあり　岡田　節人

一九九二

6・26　〈大洋感情〉と宗教の発端　岩田　慶治

9・25　ロマン・ロランとイタリア　戸口　幸策

10・30　ロマン・ロランの革命劇をめぐって　鶴見　俊輔

11・27　宮本正清　没後十年記念追悼会
ピアノ演奏：山田　忍
静かにやさしき顔　佐々木斐夫
不思議な静けさ――宮本正清の世界　小尾　俊人

一九九三

1・29　自伝的諸作品について　佐々木斐夫

1・29　ロマン・ロランの演劇的世界　石田　和男

5・24　ガンディーとロマン・ロラン　山折　哲雄

6・23　『魅せられたる魂』を語る（前）　重本恵津子

10・15　『魅せられたる魂』を語る（後）　重本恵津子

一九九四

1・28　いま、ロマン・ロランを語る
尾埜　善司・今江　祥智

9・9　ロマン・ロランと音楽　中野　雄

10・14　神秘と政治　ロマン・ロラン、その思索と行動のあいだ　B・デュシャトレ
ロランとフランス革命　河野　健二
自然科学とゲーテ　岡田　節人

12・3　ロマン・ロランとドイツ音楽　岡田　暁生
ベートーヴェン、デュカ他作品
ピアノ演奏：小坂　圭太

12・24　おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」　今江　祥智
映画上映「また逢う日まで」（監督　今井　正）

一九九五

1・27　ロマン・ロランと日本人たち　小尾　俊人

6・2　私の歩んだフランス文学の道　片岡　美智

11・10　ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺　岡田　暁生

一九九六
6・14　ロマン・ロランとの出会いから　鄭　承姫
11・16　レクチャーコンサート　岡田　暁生
ベートーヴェン：ピアノソナタ　第21番、28番
ピアノ演奏：北住　淳
11・18　「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン　本山　美彦
一九九七
1・17　「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと魯迅　區　建英
6・6　わが青春と一生　岩淵龍太郎
9・19　ロマン・ロランと結核の時代　福田　眞人
10・4　ピアノとチェロのための夕べ
ピアノ演奏：北住　淳
ロマン・ロラン記念コンサート
チェロ演奏：小川剛一郎
一九九八
6・8　ロマン・ロランと種蒔く人　柏倉　康夫
9・25　ロマン・ロランと政治的魔術からの解放
柳父　圀近
10・30　ロマン・ロラン記念コンサート
ピアノ演奏：小坂　圭太
レクチャー：岡田　暁生
11・25　ロマン・ロランと大佛次郎　村上　光彦
一九九九
6・11　ロランと音楽　岡田　暁生
10・8　「日本ロマン・ロランの友の会」五十周年記念
〝園田高弘ベートーヴェンを弾く〟　園田　高弘
お話とピアノ演奏
12・1　ロマン・ロランとインドの精神　森本　達雄
二〇〇〇
10・13　ロマン・ロラン没後五十五年と日本
佐々木斐夫
二〇〇一
2・23　ロマン・ロランと〈老いの豊かさ〉　青木やよひ
シンポジウム　今江　祥智
尾埜　善司
6・23　(財)ロマン・ロラン研究所設立三十周年記念
コンサート　神谷　郁代
〝神谷　郁代　ベートーヴェンを弾く〟

12・21　ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー
ディディエ・シッシュ

二〇〇二

4・20　ロマン・ロラン記念スプリングコンサート
ヴァイオリン演奏：ピエール・イワノヴィッチ
ピアノ伴奏：郁子・イワノヴィッチ

11・11　ロマン・ロランの後継者たち　蜷川　譲

二〇〇三

4・19　ロマン・ロラン記念スプリングコンサート
ヴァイオリン演奏：ピエール・イワノヴィッチ
ピアノ伴奏：郁子・イワノヴィッチ

5・10　ロマン・ロランの作品による音楽とレコード
尾埜　善司
ピアノ演奏：沖本ひとみ

5・31　戦争と平和、科学を考える
プリーモ・レーヴィを語る
ジル・ド・ジェンヌ
解説　西成　勝好

11・22　ロマン・ロランを読みながら　今の世界を考える
峯村　泰光

二〇〇四

5・29　〝きょう〟を読む『京都、半鐘山の鐘よ　鳴れ！』
朗読とおはなしの会
おはなし　尾埜　善司　　朗読　村田まち子

7・16　ロマン・ロラン記念サマーコンサート
ヴァイオリン演奏：ピエール・イワノヴィッチ
ピアノ伴奏：郁子・イワノヴィッチ

9・11　抗日中国における中仏文化交流
中国の知識人はロマン・ロランをどのように評価したか
内田　知行

二〇〇五

1・29　現代の法とヒューマニズム
加古二郎と瀧川事件
園部　逸夫

6・12　ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート
梅原ひまり　神谷郁代デュオ
ヴァイオリン演奏：梅原ひまり
ピアノ演奏：神谷　郁代

6・25　生々発展する魂
ゲーテとベートーヴェンそしてロマン・ロラン
青木やよひ

10・29　交差する肖像
　　ロマン・ロランとクローデル
　　　　　　　　　J・F・アンス
　　　　　　　　通訳　原口　研治

二〇〇六
11・24　戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン
　　　　　　　　　　山口　俊章

二〇〇七
1・20　日本におけるロマン・ロラン受容史
　　　　　　　　シッシュ・ディディエ
　　　　　　　通訳　シッシュ由紀子
　　　琴　笙　ヴァイオリンによる新春コンサート
　　　　　　　　　　大谷　祥子
　　　　　　　豊　剛秋・増永雄記

2・3　歌と朗読の会
　　　　　　　　　歌：下郡　由
　　「ピエールとリュース」朗読
　　　　　　　尾埜　善司　ほか　会員

7・21　朗読の会
　　第一次世界大戦とロマン・ロラン
　　そして『母への手紙』

10・13　　　　　　　村田まち子・宮本ヱイ子
　　中国研究を通しての日仏交流
　　京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合
　　　　　　　　　　狩野　直禎

11・6　『ピエールとリュース』を演出して
　　　　　　　　　　今藤政太郎

二〇〇八
3・8　朗読の会
　　親子で読む・聴く『ジャン・クリストフ物語』
　　　　　　　　　　会員たち

6・28　中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷
　　　　　　　　　　榎本　泰子

9・16　前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演
　　ロマン・ロランと日本人たち
　　　　　　　　　　尾埜　善司

10・4　ロマン・ロラン国際平和シンポジウム
　　宮本正清の詩『焼き殺されたいとし子らへ』
　　「わらい」朗読
　　　　　　　　　　尾埜　善司
　　　　　　　　フランソワ・ラベット

10・4　ロマン・ロランが愛したベートーヴェン
　　　　　　　　ピアノ演奏：神谷　郁代

二〇〇九

2・7　朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』
ピアノ演奏：岩坂富美子
朗読：下郡　由ほか

6・13　「日本ロマン・ロランの友の会」六十周年記念
レクチャー・ギター　コンサート　西垣　正信

9・30　フー・ツォン　ピアノリサイタル　フー・ツォン

10・24　犠牲の宗教への問い　高橋　哲哉

二〇一〇

7・24　小林多喜二とロマン・ロラン――反戦・国際主義の文学を求めて　エヴリン・オドリ

9・29―10・3　一九五三年のフランスの子供の絵特別出品（京都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓作品展）

10・9　ピアノリサイタル　神谷　郁代

二〇一一

2・19　朗読の会　トルストイ没後一〇〇年記念『トルストイの生涯』『伯爵様』　会員たち

二〇一一

11・19　フロイトとロラン――災厄の後に、幻想の前で　小森謙一郎

二〇一二

1・27　『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会――小尾俊人氏へのオマージュを込めて――京都会場
講演「ジャン・クリストフ」を読みかえして　村上　光彦
ロマン・ロランとみすず書房と小尾俊人さん　守田　省吾

3・5　スピーチ　フィリップ・ジャンヴィエ・カミヤマ
朗読の会
女たちの祭典・ワークショップ『魅せられたる魂』
アンネットとシルヴィ　会員たち

3・29　『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会――小尾俊人氏へのオマージュを込めて――東京会場
琴とヴァイオリン合奏
琴：大谷　祥子　ヴァイオリン：白須　今
『春の海』　宮城道雄 作曲
『夢のあと』　フォーレ 作曲

7・28　朗読の会『魅せられたる魂』

アンネットとシルヴィ

於　ロマン・ロラン研究所

10・20　ロマン・ロランと賀川豊彦　濱田　陽

二〇一三

6・22　ヴィヴェーカーナンダ生誕一五〇周年記念

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯と
メッセージ

スワーミー・サティヤローカーナンダ

7・6　〈朗読とピアノ〉オマージュ宮本正清

〈朗読〉『戦時の日記』『ジャン・クリストフ物語』

詩集『焼き殺されたいとし子らへ』

朗読　会員たち

〈ピアノ〉　岡田　真季

作曲　ポール・デュパン

曲目『ジャン・クリストフ』

11・16　世界遺産ヴェズレー　ロマネスク芸術の宝庫

アンドレ・アンジェイ・グルシェフスキ

二〇一四

9・26　シター演奏と朗読

シター演奏　中川　啓子

朗読「ピエールとリュース」など　会員たち

11・1　第一次世界大戦一〇〇年とロマン・ロラン没後七〇
年記念　I・F〈読書の秋〉共催

第一次世界大戦下の知識人――アランとロマン・
ロラン　久保　昭博

読書会報告

例会、原則第四土曜日　午後二時~四時

於ロマン・ロラン研究所

二〇一四年、四月二六日、五月二四日、六月二八日、七月二六日、九月二七日、一〇月二五日、一一月二九日。二〇一五年、一月二四日、二月二八日、三月二八日、以上一〇回。三二七回、友の会から数えると五〇二回終了。テクストは、『ロマン・ロラン伝』ベルナール・デュシャトレ著。

通年　参加総数一六〇人

二〇一四年度　賛助会員、寄付者名簿　（アルファベット順・敬称略）＊特別会員及同等寄付者

赤松　博司　安倍　道子　有馬通志子
シッシュ・D・由紀子　福田　幸子　福田　由美
古家　和雄　古田　武司　権　英子　五島　清子
長谷川和宏　＊長谷川治清　早川工務店（早川　友二）
濱田　陽　林　次郎　林　千恵子　日野二三代
＊本郷美智子　位田　隆一　池垣　勇　今井　香子
今西　良枝　＊稲畑産業株式会社（稲畑　勝雄）
井上　隆雄　石川　楢一　＊伊藤　朝子　井土　真杉
井上　幸子　岩坪嘉能子　神谷　郁代　狩野　直禎
加藤　澄子　加藤富美子　河合　綾子　久保　久子
木下　洋美　清原　章夫　黒柳　大造　松田有美子
峯村　泰光　宮本ヱイ子　森本　達雄　森内冨美子
＊森内依理子　守田　省吾　村上　光彦　村上　葉
室谷　篤男　村田まち子　村山香代子　永易　秀夫
永田　和子　中村　信子　中田　裕子　西村　秀美
西村七兵衛　＊西成　勝好　西尾　順子　野村　庄吾
乗金　瑞穂　能田由紀子　岡部　素行　大川起示子
岡山　善政　沖本ひとみ　奥村　一彦　奥村　令子
折田　忠温　大谷　祥子　坂井　昇　酒井　保子
坂谷　千歳　佐久間啓子　佐々木雅子　志賀　錬三
下郡　将宏　下郡　由　所司　育代　園部　逸夫
鈴木　明子　田間　千晶　谷口　景子　谷口　良則
田代　輝子　田谷　昭夫　徳永　勲保　東野　孝人
月ヶ洞晶子　上原　栄子　植松　晃一　上西　妙子
馬木　紘子　梅田　菊代　梅原　ふさ　氏家　玲子
和田　義之　八木美佐子　安木由美子　山口　俊章
山本　和枝　山下　雅子　柳父　圀近　柳田　基

寄贈図書

フランス　ロマン・ロラン協会

1、冊子 *Cahiers de Brève* no 33, 34

2、Romain Rolland et Georges Duhamel, *Correspondance* (1912-1942) Paris Classiques Garnier

郁子・イワノヴィチ

1、Romain Rolland, *Vie de Beethoven* Bartillat 2015

『ユニテ』編集を終えて

ユニテ四二号を会員諸兄姉の手元へお送りすることができ嬉しく思います。

この一年大変な報道が世界各地から送られてきました。「瓶のふた」が開いたように世界中で暴力が噴出しています。イスラム国の勃興、日本人人質の殺害やフランス週刊誌銃撃に象徴される過激化するテロの恐怖、米軍無人機による報復爆撃・殺害など、大戦前夜の様相です。世界中がバルカン化しているようにも見えます。

そんな中で、折しも第一次世界大戦開戦一〇〇年、ロマン・ロラン没後七〇年を記念して本号の巻頭に久保昭博さんの研究を載せることはとても時宜にかなったことと思います。久保さんの論文はアランとロランの思想と行動を比較する中で、反戦と平和の立場の共通性とその違いを比較するところからはじめています。

ロランの平和主義と非暴力について、第一次大戦前後と今日的状況を同様と考えることに多少の無理はありますが、大きな示唆を与えられるものと思います。

本論文がきっかけになって大きな議論が巻き起こることを願っています。

今回も一般会員からの寄稿を多く載せることができました。厚くお礼申し上げます。

ユニテが皆さん方のものです。こうした寄稿がますます盛んになることを願っています。どうぞ遠慮なくどんどんお寄せ下さい。

追悼：本研究所前理事　今江祥智さんが去る三月二〇日八三歳で肝臓癌のため逝去されました。

今江さんは童話作家としてご活躍、戦後の日本文学に大きな影響を与えられました。

前理事長の故尾埜善司さんとは学生時代からロマン・ロランを通じて深く親交され、本研究所のシンポジュウムや対談でもご尽力いただきました。

心からご冥福を祈ります。

（文責　野村）

編集部
守田　省吾
野村　庄吾　中田　裕子
西村七兵衛　宮本ヱイ子

ユニテ　第四十二号

発行日　二〇一五年四月一〇日

発行者　一般財団法人
ロマン・ロラン研究所
理事長　西 成 勝 好
京都市左京区銀閣寺前町三二
電話・ＦＡＸ
（〇七五）七七一－三二八一
郵便番号　六〇六－八四〇七
郵便振替振込口座番号
〇一〇五〇－九－五九九九六

印刷所　(株)北 斗 プ リ ン ト 社

URL　http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/
E-mail　rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp

No 42 Avril 2015

U N I T É

Sommaire

Les intellectuels à l'heure de la première guerre mondiale: Alain et Romain Rolland avec le résumé de la conférence rédigé en français par le conférencier — Akihiro KUBO

A la mémoire de monsieur Mitsuhiko MURAKAMI — Kazuko NAGATA

Ma collection de manuscrits de Romain Rolland — Kôichi UEMATSU

Quelques réflexions sur la conférence de M. Akihiro KUBO — Masugi IZUTI

Adaptation théâtrale de *Pierre et Luce* par la compagnie GEKI-KEN — Hiroko NAKATA

Quelques nouvelles de Paris — Yukiko CHICHE

Hommage au regretté professeur Toshiaki YAMAGUCHI — Taeko UENISHI

Sujets divers

Compte - rendu des activité de l'Institut Romain Rolland

Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland

Annuaire 2014 des membres et donataires

Postface

Publication: Institut Romain Rolland
32 Ginkakuji maé, Sakyo-ku, Kyoto 〒606-8407